
〈論 文〉

「マルチチュード」は、自らをいかなる「階級」とするのか

What kind of “class” does “the Multitude” make itself?

浅 川 雅 己

要旨：

本稿の目的は、『〈帝国〉』、『〈帝国〉をめぐる五つの講義』、『マルチチュード』などに拠って、ネグリらの一連の作業の鍵概念を整理することで、21世紀におけるマルクス継承の可能性と意義を明確にする作業の端緒を開くことにある。手はじめに「マルチチュード」と「労働者階級」との関係について取り上げる。

(キーワード：マルチチュード，労働者階級，多様性と統一性，マルクス)

も く じ

はじめに

1. なぜ「労働者階級」ではないのか
 - a. 「拡張的・包括的な階級定義」
 - b. 「産業労働者階級」の範型的地位の喪失
 - c. 「統一性か多様性か」
2. 諸評価
 - a. 「資本の分断支配の無視」という向井公敏氏による批判
 - b. 「多様性と戦略」, アレックス・カリニコスによる論評

おわりに

はじめに

Michael Hardt と Antonio Negri の “EMPIRE” が出版されて既に十年が経過した。邦訳の出版から数えても七年である。ひところの喧騒は去ったとはいえ、本書やそれに前後して公表されたネグリ、ハート、あるいはヴィルノらの、マルチチュードを鍵概念とする一連の業績について言及した研究は、最近も途切れることなく続いている。

筆者は、ネグリらの一連の業績を手取るタイミングを完全に失っていたが、最近になっ

てようやく、たまたま、『<帝国>』、『マルチチュード』などに目を通す機会があり、これら一連の著作が、読む者のマルクス理解を鋭く問い返してくるものであることに気づかざるを得なかった。

本稿の目的は、『<帝国>』、『“帝国”をめぐる五つの講義』、『マルチチュード』などに拠って、ネグリらの一連の作業の鍵概念を整理することで、21世紀におけるマルクス継承の可能性と意義を明らかにする作業の端緒を開くことにある。

今後、「マルチチュード」「The Common」「再領有」という三つの概念を対象を絞って、その規定内容を読み取る作業をしていく、これを通じてネグリとマルクスの異同、継承関係およびズレや捻じれの所在やその内容を明らかにすることになるが、本稿ではまず手始めに「マルチチュード」を取り上げる。

『マルチチュード』では、その冒頭部分で、「マルチチュード」の概念が「人民」、「大衆」、「労働者階級」という、資本主義における非抑圧者の一群を指して用いられてきた諸概念とは明確に区別されるべきものであるとの主張が展開されているが、本稿では、「マルチチュード」とマルクス派の見解の中で主要な地位を占めてきた「労働者階級」との関係について取り上げることとしたい。

1. なぜ「労働者階級」ではないのか

a. 「拡張的・包括的な階級定義」

『マルチチュード』に先立ち、既に、『<帝国>』において次の様な主張がなされていた。

《われわれは、労働と反乱の主体が根本的に変わってしまった [has changed] ことを認めなければならない。プロレタリアートの構成 [composition] が様変わり [has transformed] したのだから、われわれの理解もすっかり変更 [has transformed] される必要がある。》¹

ここに既にきわめて重要な指摘がなされている。「労働と反乱の主体が根本的に変わってしまった」のであはるが、その「根本的な変化」の中身は、プロレタリアートの内的構成の変化である。つまり、それはその内的構成がすっかり様変わりしてしまっても、依然としてプロレタリアートなのである。

《概念的見地において、われわれは、プロレタリアートを、その労働が直接であれ間接で

¹ Michael Hardt and Antonio Negri, *Empire* (Cambridge, Harvard University Press, 2000) —— 以下 [Em] —— から訳出, p.52, 訳出に当たっては、水島他『<帝国> —— グローバル化の世界秩序とマルチチュードの可能性』(以文社, 2003年)を参照した。

あれ、生産と再生産の資本主義的な規範によって搾取され、従属化されているすべての人々を含む、広範な範疇として理解する。》²

このようにネグリらは、「プロレタリアート」をその内部に時と場所により様々な構成を含みうる包括的な概念、「広範な範疇」として理解し、その包括規定として資本による搾取、資本への従属を指摘する。

《前の時代には、プロレタリアートのカテゴリーの中心は、産業労働者階級が占めていた。そしてときどき実際に、その範型的な人物像が男性の大規模工場の労働者であった産業労働者階級の下にプロレタリアートの総体が包括された。その産業労働者階級はしばしば経済の分析と政治的な動きの両方において（小作農労働力と再生産労働力のような）労働の他の形象を越える主導的役割を与えられた。今日その産業労働者階級はほとんど視野から姿を消した。それは存在することをやめなかったが、資本主義経済でのその特権的地位とプロレタリアートの階級構成中の主導的地位から追い出された。プロレタリアートは、かつてのそれとは違っているが、消失したわけではない。それよりもむしろ、我々が階級としてもう一度プロレタリアートの新しい構成を理解するという分析的な仕事に直面していることをそれは意味している。》³

プロレタリアートそれ自体が存在することをやめたわけでもなく、ましてや階級一般が意味を失ったわけでもない。以前は、大規模工場の男性労働者を範型とする産業労働者階級によってプロレタリアートのカテゴリーの中心が占められていたが、産業労働者階級は、プロレタリアート内部でのその特権的地位を失ったのであって、いまや産業労働者階級を中心に構成されていたプロレタリアートの以前の内的構成に代わる新しい内的構成が問題なのである。

《私たちが、資本主義的支配によって搾取され、それに従属させられているすべての人々をプロレタリアートの範疇に属するものと理解しているという事実は、プロレタリアートが均質のないしは無差異の単位であることを示しているわけでは決してない。実際、プロレタリアートは、差異と階層化に応じて様々な方向に切り分けられるのである。》⁴

² Ibid.

³ [Em], pp.52-53.

⁴ Ibid, p.53.

《私たちがここでさしあたり強調しておきたい点は、これらの様々な労働形態のすべてが、なんらかの仕方で資本主義的規律や資本主義的生産関係に従属しているということである。資本の内部にあって資本を存続させているという、この事実こそがプロレタリアートを階級として規定するものなのである。》⁵

以上の考察から二つのことがわかる。

プロレタリアートの総体規定は、「資本主義的支配によって搾取され、それに従属させられているすべての人々」、あるいは「資本主義的規律や資本主義的生産関係に従属し」「資本の内部にあって資本を存続させている」すべての人々である。

第二に、これらの人々は、様々な差異をもった多種多様な存在からなっている。かつては、これらの諸階層が大規模工場の男性労働者という範型によって代表され、実際にも工場労働者のもとに他の諸階層が包括される傾向があったが、いまや「産業労働者」のそのような優位は存在しない。

《これは、新しいプロレタリアートであって、新しい産業労働者階級ではない。この区別は根本的なものだ。先に説明したように「プロレタリアート」は資本によって自らの労働を搾取されるあらゆる人々、つまり協働するマルチチュードを指示する一般的概念である。》⁶

このような主張は、『五つの講義』を経て『マルチチュード』に至っても基本的に変わらない。

《マルチチュードを資本の支配のもとで働くすべての人々、したがって潜在的には資本の支配を拒否する人々からなる階級としてとらえてみよう》⁷

として、やはり、「拡張的・包括的な階級定義」が打ち出される。しかし、『<帝国>』では、「プロレタリアート」に与えられていた規定が、ここでは「マルチチュード」に対して与えられている。「マルチチュード」は『<帝国>』で「プロレタリアート」に与えられた包括的規定を引き継いでいるのである。

⁵ Ibid.

⁶ [Em], p.402. 原文の斜体字による強調を傍点に置き換えた。

⁷ アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート著、幾島幸子訳『マルチチュード（上）<帝国>時代の戦争と民主主義』日本放送出版協会、2005年（以下『マルチ（上）』、同書下巻は『マルチ（下）』）、p.182。

そして、この「マルチチュード」と「産業労働者階級」の関係についても次のように述べられている。

《産業労働者階級の数は世界的規模では減少していないものの、この階級はもはやグローバル経済において主導的役割を果たしていない。他方、今日における生産は、単に経済的な見地からだけでなく、社会的生産(物質的な財の生産のみならず、コミュニケーション・さまざまな関係性・生の形態といった[非物質的な]ものの生産を含む)というより一般的な見地から考えられなければならない。／このようにマルチチュードは、これらの多様な社会的生産の担い手をすべて潜勢的に含んでいるのである。》⁸

「マルチチュード」は新しい内的構成を獲得し、もはや「産業労働者階級」によっては代表されることのできなくなった「新しいプロレタリアート」なのである。

b. 「産業労働者階級」の範型的地位の喪失

「産業労働者階級」の特権的地位ないし、中心的な役割は、マルチチュードとして再定義された新しいプロレタリアートにとっては、もはや事実として妥当しない。むしろ、マルチチュードへと進化したプロレタリアートにそれを求めることは、この新しいプロレタリアートの階級としての統一性を解体することになる。

《労働者階級という概念は今や、生活を維持するために働く必要のない所有者から労働者を区別するためだけでなく、労働者階級をそれ以外の働く人びとから切り離すための排他的な概念として用いられている。》⁹

冒頭で提示されたこの主張は、本書の中盤以降で詳しく展開される。

《労働者階級という概念からその他の労働形態が排除されるのは、例えば男性の工業労働者と出産・子育てにまつわる女性の再生産労働、工業労働と農業労働、就労者と失業者、労働者と貧者といったもののあいだに種類の違いがあるとする考え方にもとづく。労働者階級は、主要な生産的階級であり、資本の直接的な支配下に置かれているため、資本に対抗して効果的に行動できる唯一の主体だと考えられているのだ。それ以外の被搾取

⁸ 『マルチ(上)』, pp.20-21。

⁹ 同上, p.20

階級は、資本と闘うことがあっても、労働者階級の指揮に従う場合に限られる。》¹⁰

この文章には、ネグリらの真意を正確に表現できていない点がある。「産業労働者階級」の範型的地位の根拠は、プロレタリアートの内の諸階層間に「種類の違いがある」ことそれ自体に求められてきたわけではない。

そうではなくて、この「違い」が、資本の支配が各層に遍く及ぶ上での障害となっており、この障害克服の過程が、初期大工業がもたらす労働の単純化によるプロレタリアート諸階層の「生活状態の平均化」¹¹として進行していくことになったからにはほかならない。この傾向が続く限り、非「産業労働者階級」諸階層の将来の立場、将来の利害が「産業労働者階級」のそれとして予示されているという考え方は一定の根拠を持つことになる。単に諸階層のあいだに「種類の違いがある」だけでなく、その違いが資本の支配がその階層に及ぶことを妨げているという認識が重要であり、さらにその違いは、違い自体が消失するとは限らないが、資本の支配の拡大の障害としては、やがて作用しなくなるという見通しが肝心なのである。このような認識と見通しがあるときにかぎり、「産業労働者階級」の他の諸階層に対する範型的地位を主張することができる。

しかし、そのような条件は今日では、失われたのである。

《これが過去に事実だったかどうかはともかく、マルチチュードの概念は、もはやそうした考えが今日には当てはまらないという事実立脚している。別の言い方をすれば、マルチチュードの概念は、どんな労働形態も政治的優先権を持たないという主張にもとづいているのだ。今日のあらゆる労働形態は社会的生産にかかわり、ともに生産し、そして資本の支配に抵抗する共通の潜勢力を分かち持っているのである。これは抵抗の機会が均等に与えられていると考えることもできる。》¹²

ところで、このように言いうるためには、過去の「生活状態の平均化」傾向に代わって、「資本の支配に抵抗する共通の潜勢力を分かち持」つことができるというその根拠が示されなければならないのであり、よく知られているようにネグリらは、それを「非物質的労働」のうちに求めている。

そのことの当否についての検討は、本稿の課題と不可分の論点、とうよりもむしろネグリ

¹⁰ 同上, p.182。

¹¹ マルクス・エンゲルス著、村田陽一訳『共産党宣言』大月センチュリーズ、1995年、p.22。

¹² 『マルチ（上）』, pp.182-183。

らの議論の核心、本丸であるといえるが、本稿では、ひとまず外堀を埋める作業に徹したい。「非物質的労働」については、この後に予定されている「The Common」についての考察に譲ることとする。

c. 「統一性か多様性か」

『マルチチュード』での叙述としては、前節で検討した「拡張的・包括的定義」の提起に先立って取り上げられているにもかかわらず、本稿の展開の都合上、後回しにした問題をここで取り上げる。

《経済的階級に関する理論は伝統的に統一性か多様性かの二者択一を迫られてきた。統一性を取る立場は通常、マルクスと彼の主張に関連付けられる。すなわち、資本主義社会では階級カテゴリーが単純化する傾向にあり、あらゆる労働形態はそれに伴い、資本と対峙するプロレタリアートという単一の主体に収斂するという主張だ。》¹³

この主張が、前項で検討した「産業労働者階級」の範型的地位を承認する立場と重なるものであることは容易に見てとれるであろう。

これと相対峙するのが、以下の「自由主義的議論」である。

《他方、多様性をとる立場のもっとも明らかな例は、社会階級は多様であること避けられないと主張する自由主義的議論である。》¹⁴

つまり、ネグリらは、これまでの「階級」に関する議論の中に「収斂」説と「多様化」説の二つの傾向を見てとるわけである。

そして、この両説について彼らは次のように述べる。

《どちらの見方も実際それなりに正しい。最初の立場に関して言えば、資本主義社会は資本と労働、生産的財産を所有するものと所有しないものとの分裂を特徴としており、さらに財産を持たない者の労働条件と生活条件は、共通の特徴を帯びる傾向があることは事実である。そして第二の立場に関して言えば、現代社会は経済的差異のみならず、人種・民族性・地理的配置・ジェンダー・セクシュアリティなど様々な要因にもとづく潜

¹³ 『マルチ(上)』, p.177。

¹⁴ 同上, pp.177-178

在的な無数の階級によって構成されているということもまた事実である。》¹⁵

「資本主義社会は資本と労働、生産的財産を所有するものと所有しないものとの分裂を特徴とし」と「様々な要因にもとづく潜在的な無数の階級によって構成されている」という。注目されるのは、後者が「潜在的な」「階級」とされている点であろう。

《統一性か多様性かのいずれかを選ばせるという立場は、階級を単なる経験的な概念であるかのように扱っており、階級そのものが多分に政治的に定義されるという事実を見過ごしているのである。》¹⁶

「政治的に定義される」という意味は、「理論的に」というよりも次のような実践的な意味合いで言われている。

《階級は、闘争によって決定される。もちろん、人間を階級に分類する方法は髪の色や血液型など無限にあるが、重要な意味をもつ階級は集団闘争の路線によって定義されるものだ。…中略…人種は人種に対する抑圧によって作られると主張する者もある。だがこの論理をもう一步進めるべきだ——人種は人種的抑圧に対する集団的抵抗を通じて立ち現われるのだと。同様に経済的階級も、集団的な抵抗活動を通じて形成される。したがって、経済的階級に関する探究の出発点は、人種の場合と同様、ただ単に経験的な差異を並べあげるのではなく、権力に対する集団的抵抗の路線に着目することにある。手短に言えば、階級とは、ともに闘争する集団性であり、そうでしかありえないという意味において、階級は政治的な概念に他ならないのである。》¹⁷

人種、民族性、地理的配置、ジェンダー、セクシュアリティなど様々な要因を分断と支配の条件として利用する資本に対して「マルチチュード」が行う諸々の抵抗がマルチチュードという階級の内的構成を規定することになる。

《人種とジェンダーの政治という強力な伝統はすでにマルチチュードへの欲望を内包している。例えばフェミニストはジェンダーによる差異のない世界を目指すのではなく、ジェ

¹⁵ 『マルチ（上）』, p.178。

¹⁶ 同上, p.178。

¹⁷ 同上, pp.178-179。

ンダーが問題にならない (それがヒエラルキーの基盤を形づくらないという意味で) 世界を目指しているし、同様に反人種差別活動家は人種のない社会ではなく、人種が問題にならない世界を実現するために戦っている。一言でいえば、それらは差異の自由な表明にもとづく解放のプロセスなのだ。》¹⁸

《概念的にいえば、マルチチュードは同一性／差異性という相対立する対の代わりに、〈共〉性／特異性という相補的な対をもたらす。そして、実践において、マルチチュードは個々の人間の特異性の表明が、共闘する他者とのコミュニケーションや協働によって、あるいは共通の習慣や実践行為、欲望をさらに大きく形作るための営み—— 言い換えれば〈共〉のグローバルな動員と拡大—— とのコミュニケーションや協働によって、減じられたり損なわれたりしないようなモデルをもたらすのである。》¹⁹

これに先立って上巻では次のように指摘されている。

《階級の理論は、階級闘争の現に存する路線を反映するばかりか、未来に向けた潜勢力をはらむ路線を提示するものでもあるということだ。この点での階級理論の課題は、潜勢的な集団闘争のために現存する諸条件を見つけだし、さらにそれらの条件を政治的提案として表現することである。階級とは実際のところ構成的配置であり、プロジェクトなのだ。資本主義社会においては、階級構造は二極化へと向かうというマルクスのモデルとその主張は、まさにこの意味で読まれなければならないことは明らかである。》²⁰

いわば、マルチチュードは、資本の支配に対する抵抗という協働行為のなかで特異性の相互承認を通じて、自らを階級へと構成していくということなのである。

2. 諸 評 価

a. 「資本の分断支配の無視」という向井公敏氏による批判

「産業労働者階級」が、プロレタリアート総体を代表する範型的地位を占めることができたのは、次の事情による。それは、後にプロレタリアートの内的構成に組み入れられることになる他の諸階層がまだ十分には資本の支配のものと包摂されていない上に、これら諸階層の

¹⁸ 『マルチ (下)』, p.69。

¹⁹ 同上, p.59。

²⁰ 『マルチ (上)』, p.179。

包摂が、大工業生産様式による労働の単純化を梃子として、資本の労働者に対する処遇が同等化されるというプロセスを通じて実現されていったということである。

プロレタリアート諸階層の「生活状態の平均化」の根拠は、資本の支配が先進国の成人男性工場労働者から、女性、児童へ、マニファクチュア、手工業など旧式の生産様式が残る諸部門の同じく女性、児童を含む労働者へ、さらに先進国以外の諸地域でも同様の広がりを見せ、農業もまた工業に従属することになる等々といった一連の傾向のうちに求められた。

向井氏は、「ネグリやハートは『共産党宣言』や『資本論』でマルクスが物質的労働について語ったことを非物質的労働について反復しているにすぎないであろう」²¹と述べ、ネグリらが依然としてこのような見通しをほぼそのまま引き継いでいるとみなしたうえで、次のような指摘を行う。

《『資本論』でマルクスが、また『資本論』から一世紀を経てブレイヴァマンが、熟練の解体をもたらす労働過程の技術的発展による労働者階級の均質化を、したがってまたそれによって可能になるであろう労働者階級の階級的団結を予測していたにもかかわらず、その後の資本主義の歴史が生み出した物は、まったく逆に、内部労働市場の発展による労働市場の分断であり、その結果としての労働者階級の分断に他ならなかったからである。だとすれば、こうした労働過程の技術的発展にもとづく労働者階級の均質化傾向に対するひとり非物質的労働のみが免れうるということは、あまりにも非現実的もしくは楽観的と言わざるを得ないであろう。》²²

しかし、そもそもマルクスが言う「プロレタリアートの生活状態の平均化」は、向井氏が理解するような「熟練の解体による労働者階級の均質化」ではない。どんなに熟練が「解体」されてもそれだけで労働する諸個人の生活過程（＝労働力再生産過程）の差異がなくなるわけではない。しかし、そのような差異性をはらんだ様々な再生産過程を経て供給される労働力商品であっても、価値形成能力という使用価値において相互に代替可能であれば、同一商品市場を形成し、個別的再生産費は社会的再生産費として平均化される。その限りでの平均化、労働力価値の平均化なのである。

《機械が筋力を不要とする限り、それは、筋力のない労働者、または身体の発達の未成熟な、しかし、手足の柔軟性の大きい労働者を使用するための手段となる。それゆえ、婦

²¹ 向井前掲，p.319。

²² 同上。

人労働及び児童労働は、機械の資本主義的使用の最初の言葉であった。こうして労働と労働者とのこの強力な代用物は、たちまち労働者家族の全成員を性と年齢の区別なしに資本の直接的支配のもとに編入することによって、賃労働者の数を増加させる手段に転化した。》²³

それは、資本の労働者に対する処遇の同等性の帰結だったのであり、資本は、自己にとって搾取材料として等しい使用価値をもつ労働力をほぼ同等に（押し並べて低賃金・過剰労働の源泉として搾取するという形で）処遇したのであり、それが労働者の「生活状態の平均化」に帰着したのである。

向井氏は、Katherine Stoneの研究（Origins of the job structure in the steel industry）等に依拠しつつ、大工業による熟練の解体による単純労働の普遍化と労働者階級の均質化に基づく連帯という『宣言』段階の労働者階級の戦略は、熟練解体に伴う、労働者のモチベーションの低下のような技術的な従属の深化に反比例する心理的離反に対応する資本の側の新たな戦略によって、その妥当性を失ったと指摘する（向井前掲書、第5章）。

資本の側の新たな戦略とは、内部昇進制度、インセンティブ賃金、福祉プログラム（福祉国家体制と企業内福利厚生）による労働者の「インサイダー／アウトサイダー」への分断、アウトサイダーの排除とインサイダーの包摂、それらによる労働者階級総体への統制の強化である。

ホワイトカラーに構想活動を集中するとともに、このホワイトカラー層は、構想活動を遂行する上での様々な権限が階層的に分割された官僚機構に組織され、コアなインサイダーに男性正社員が位置付けられる。ブルーカラー層に対しても、大企業男性正社員労働者をもっともコアに位置するインサイダーとし、中小企業の男性正社員をそれに準じる地位に置き、さらにその下に女性正社員、主婦パートタイマー等々を位階的に配置する。

労働者家族は、男性正社員をブレッド・ウィナー（パンを手に入れる人＝主たる生計稼得者）とする性別役割分業を採用することで家族総体が、この資本の統制戦略に「自発的に」組み込まれることになる。

先にみたように向井氏はこのような資本の戦略の変化が、最初に引用した部分にまとめた「宣言」段階でのマルクスの見通しを覆したと見る。そして、ネグリ達の対抗戦略もまた、このような「内部労働市場による労働者の分断統治」という資本の新戦略を十分配慮していないと考えるのである。

²³ Karl Marx: Das Kapital Erster Band (Karl Marx. Friedrich Engels Werke Bd. 23), Berlin (Dietz) 1962, S. 416.

確かに、マニュファクチュアに端を発する「構想と実行の分離」のフォーディズムへの発展は、先に見た内部労働市場の形成によるインサイダー／アウトサイダーへの労働者の分断、インサイダーの包摂とアウトサイダーの排除による労働者にたいする分断統治という戦略を伴う。

しかし、この戦略によっても、顕在意識レベルでの忠誠心は調達できても、労働は手段にすぎないものとなって、労働そのものへの集中力、熱中の度合いは一定レベルまでで頭打ちとなる。労働内容への関心の希薄化によるモチベーション低下、アブセンティズムがもたらされるのである。この限界を克服するあたために、これまでの「構想と実行の分離」という流れは逆転し、「構想と実行」の再統合が模索されることになる。

マニュファクチュアからフォーディズムまでは、具体的有用労働としてはもろもろの差異をもつ労働が、資本が掌握する単一の構想のもとに統合され、生産物の価値形成には、一様の抽象的人間的労働として参加する。この段階では、有用労働としての諸労働の統合・連携は資本の構想に媒介されて初めて実現する。

そのために諸労働の統合・連携それ自体が、資本の側に属するものとして現れるのである。

しかし、ひとたび構想に対する資本の独占が崩れ、現場への決定権の委譲、構想設定への現場労働者の参加が一定許容されるようになれば、労働者はその差異性（特異性）にもかかわらず、自分たちが設定する構想に基づいて直接に連携を形成することができる。勿論、現状では彼らが形成しうる連携は、資本の許容する範囲内のものでしかないのではあるが。²⁴

その点にネグリらは、「知、情報、コミュニケーション、そして情動」という「生政治的生産のための主要な手段」、「生産的な機械」のマルチチュードへの統合という現実を見出すのである。この統合は、資本の支配の新たな形態に他ならないが、だがそれにもかかわらず、ネグリらにとっては、同時にマルチチュードによるこれらの「諸手段」の自主的統御の十分ではないが必要な条件なのである。

b. 「多様性と戦略」、アレックス・カリニコスによる論評

アレックス・カリニコスは、その著書『アンチ・資本主義宣言』で次のように述べる。

《企業中心のグローバリゼーションに反対する運動は、グローバルレベルと国内レベルの

²⁴ 運輸業のコントラクトワーカーやファミレス等のパート店長などのように、雇用の安定性を欠いたまま、「権限」と「責任」が重くのしかかるケースもあり、この面からみても「構想と実行の再統合」は、それ自体が直接に労働する諸個人がおかれている状況の改善を意味するわけではない。しかし、これらの事態が、権限委譲、構想活動への参加の対象が分断統治の階層性を超えてアウトサイダー的立場の者にまで及んでいることを示しているという点も見落とされてはならないのである。

双方において不平等が解消しないことへの、また、実際には拡大していることへの対応に他ならない。過去には、こうした不平等はさまざまな階級論を通して概念化されてきた。だが、過去四半世紀の間に北の国々の組織された労働者階級がきつした深刻な敗北は、現代社会（少なくとも先進資本主義世界）は階級概念を使って理解することなどできないという思い込みを助長した。ポスト・モダニズムは、移動する個人が生産関係から切り離された多元的で浮動的なアイデンティティーを形成するという細分化された世界を描くことにより、おそらくこの思い込みを理論化するうえで最も影響力を発揮した。ハートとネグリのマルチチュードの概念はある種の妥協の産物であり、この多元性、多様性という主題を、さまざまに異なる主体の共同行動を認めるような枠組みに収めようという試みである。》²⁵

「マルチチュード」の概念が、多様化による階級の解体・解消を説く傾向に対して妥協的であるという指摘と読めるが、他方でカリニコスは、次のようにも述べる。

《要約／・反資本主義運動は、イデオロギー的な同質性とはおよそ縁遠い運動である。それは様々な政治的運動をも含んでいる。／…中略…／・反資本主義の運動のイデオロギーが多様であることは、さまざまな緊張関係や議論の中に潜在的に現れており、そこにあるのは改良か革命かという古くからのジレンマである。運動の統一を損なうことなくこうした違いを認識し、議論するための枠組みを発展させることが必要である。》²⁶

先の「妥協的」という指摘のある『アンチ・資本主義宣言』第2章の末尾、この章の「要約」、すなわち結論部分の記述である。見られるように、実は、カリニコス自身も「多元性、多様性という主題を、さまざまに異なる主体の共同行動を認めるような枠組みに収めようという試み」を決して否定してはいない。

「組織された労働者階級の戦略的役割」²⁷への軽視、「オートノミストが時として見せる組織された労働者に対する露骨な敵意」²⁸等が、「さまざまに異なる主体の共同行動」を実際には妨げているということへの懸念が表明されている。

²⁵ アレックス・カリニコス著、渡辺雅男、渡辺景子訳『アンチ・資本主義宣言』こぶし書房、2004年、pp.133-134。

²⁶ 同上、pp.144-145。

²⁷ その根拠については、「彼らに対する搾取は資本主義の中心的な運動を構成するものであるから、彼らには、生産を混乱に追い込み、麻痺させ、再編し、それによって経済活動の方向性を別の優先順位へと切り替えるだけの集団的な潜在能力が備わっている」（同上、p.137）と指摘されている。

²⁸ 同上、p.140。

おわりに

本稿では、『<帝国>』に代表されるネグリらの一連の議論の全体像をつかむための第一歩として、「マルチチュード」概念と「労働者階級」との関係に的を絞って考察してきた。特にマルチチュードの「多様性と統一性」について中心的に考察してきたが、ネグリらの議論が単なる収斂説にも、また、事実上の階級解消論にも、簡単には還元しえないものであることが確認できたと考える。

次なる課題として焦点化してきた問題は、マルチチュードの「統一性」の根拠は何かという問題である。

筆者の見るところ、ネグリらは、それを「The Common」の概念によって説明しようと試みている。この点の検討が続稿での主題となるだろう。

(あさかわ まさみ マルクス経済学)